九州阿高式系・縁帯文系土器群の研究

―縄文中・後期の土器ホライズンの形成とその背景―

The Study of Pottery's Horizon
in the Late Jomon Period in Kyusyu

三　輪　晃　三

Akimitsu Miwa

I　はじめに

九州縄文時代後期には瀬戸内地方からの新しい文化要素が複合的に流入して受容され、また一方では朝鮮半島南部と特定の文化要素を共有する地域もあった。本稿ではこのような社会状況の中、ホライズン（Horizon；小杉1994ｐ．19）を形成する土器型式に着目し、その成立と崩壊の過程を南九州を中心に追究し、ホライズン形成の背景を探ることを目的とする。土器から見た社会動態の様相を検討することで、文化動態研究の一助としたい。

なお土器編年を通じて広域編年を想定した場合、地域を異にしながら複数の土器型式が共時的に存在する可能性があるため、時間的細分として区分する場合に「期」を用いる。ただし複数の土器型式が遺構内で共伴する事例が少ないため、型式学的操作によって時期設定を行った。

II　阿高式系土器群の研究

1　研究史

南九州では貝殻条痕を地文とする土器伝統が指摘され（河口1957ｐ．23）、阿高式以降の岩崎下層式、岩崎上層式、指宿式等を「貝殻文系土器」と総称した（鈴木1962）。具体的考察については、河口貞徳（河口1953，1981ｐｐ．103－104）、前川威洋（前川1979）、松永幸男（松永1989）、水ノ江和同（水ノ江1993）等が行っている。

中九州では阿高式及び後続する南福寺式・出水式を一連の土器型式群として前川威洋が「阿高式系土器」（前川1969）と大別して以後、その具体的な細分案は田中良之（田中1979，1982など）と川崎保（川崎1991など）による論考のみである。近年では春日式の年代的位置の再検討（東1989など）や層位事例などから、阿高式の所属時期の見直し[1]が提示されている（矢野1993，徳永1994）。

九州の在地土器と瀬戸内系磨消縄文土器との関連について言及した多くの先学の中で、阿高式系土器の「様式」構造の変容については、土器分布圏の核（中九州）地域の活力衰退によって、異系統土器である磨消縄文土器が土器様式の主体を占め阿高式系土器の粗製化を誘発する、というモデルの提示がある（田中1982）。一方南九州東部でも磨消縄文土器西漸の波状的影響を受けるが、「様式」内で系統間におけるレベル差はなく中九州地域との受容形態の質的相違がある、との指摘もある（松永1989）。

研究史上、貝殻文系土器と阿高式系土器との関係については明らかにされていなかった。そこで便宜上両者[2]を合わせて「阿高式系土器群」と仮称し、両者がどのような経緯・背景の中で分化したのか、以下に明らかにしたい。

2　阿高式系土器群の成立

春日式の終焉たる南宮島段階（東1989）では、屈曲ないしは肥厚する口縁部に二枚貝刺突文を施す土器、口縁部に沈線文・押引文を施す土器、口縁部に突帯を貼付してそれ自身を文様とし、かつその上に二枚貝刺突文を施す土器を認めることができる。この３つの文様系譜は後続する中尾田Ⅲａ類・Ⅲｂ類（新東・中島・井ノ上1981）にも踏襲されるので、ここで順に「中尾田Ⅲａ－１類」、「中尾田Ⅲａ－２類（大平式）・中尾田Ⅲａ－３類」、中尾田Ⅲｂ類としておく。また屈曲や肥厚によって口縁部を形成せずに、胴部まで文様突帯を貼付するものを新たに「並木式１類」と仮称し、文様突帯を貼付しない所謂並木式を「並木式２類」として分離する。以上の各分類は時間差・地域差・系譜差のいずれかを示す。

そこで表１を見ると、南九州東部では並木式１・２類が、北九州では大平式が各々未検出であり、並木式１・２類と大平式とは地域遍在を認めることができる。よって両者は時間差ではなく地域差の可能性が高い。このことから南九州東部では大平式を経て阿高式に、一方北九州では中尾田Ⅲ

地域・遺跡名 ＼ 土器分類		中尾田 IIIa-1	大平式	(宮之迫1～) 阿高式	中尾田 IIIa-3類	中尾田 IIIb類	並木式1類	並木式2類
北九州	平　原	－	－	△	○	△	△	○
南九州	松美堂	○	△	○	－	△	－	○
西北部	上田代	○	△	○	－	○	△	△
	中尾田	○	○	○	○	○	－	○
南九州	加治屋園	－	○	○	△	－	△	○
中・南部	成　川	－	○	△	－	－	－	○
南九州	岩　立	－	○	○	○	－	－	－
東　部	轟木ヶ迫	－	○	△	△	－	－	－
	倉園A	－	○	○	－	－	－	－
	大　平	－	○	○	－	－	－	－

－　未検出　　○　組成の中で主体を占める土器
△　組成の中で微量の土器

表１　阿高式出現直前期の土器出土状況

ｂ類の発展形態である並木式１類が並木式２類に各々変容する、という仮設が成り立つ。では次に先の分類毎に型式学的検討を行い、検証を行う。

中尾田IIIａ－１類は口縁部に二枚貝刺突文を施すが、口縁部文様帯の下端に凹点文を付加するもの（図４－１）は新しい要素である。この二枚貝刺突文は短凹線文となり、阿高式の口縁部に特有の交互凹点文へと変容する。

大平式（図４－11～14）は段状肥厚によるやや幅広の口縁部を持ち、横走沈線を部分的に鋸歯状に変化させる。大平式の文様には横位文様（図４－11）と縦位文様（図４－14）とがあるが後者が新しい要素である。後者において口縁部文様帯の下端に刻目列を施す点は、中尾田IIIａ－１類の変化と共通し、両者の並行関係を示している。

中尾田IIIａ－３類（図４－９）は阿高式の凹線にも類似するやや太めの沈線文を展開させる。ただし阿高式とは口縁部が肥厚している点が大きく異なり、渦文や同心円文を始め縦位文様が多い。図４－13は縦位施文の大

平式の文様区画内に中尾田Ⅲａ－３類の渦文を配しており、折衷土器として評価できる。

中尾田Ⅲｂ類（図４－２）は屈曲ないしは肥厚する口縁部に文様突帯を貼付することを原則的な特徴とする。同様な特徴をもつものとして、幅広の口縁部文様帯を持つか、もしくは口縁部以下にも施文する並木式１類[3]（図４－３，４）が存在する。並木式１類には突帯間に凹線文や押引文を付加したものがあるが、これは突帯間の無文部にナデを行う中尾田Ⅲｂ類（図４－２）が発展したもので、この突帯が形骸化し、押引文・刺突文が残存した形態こそが並木式２類（図４－５）であろう[4]。なお図４－７，８は大平式の口縁部を持ち、凹線間に二枚貝刺突文を横位に施す並木式２類の文様構成を持つ折衷土器として解釈できる。

さて阿高式は幅広の文様帯を持つが、中尾田Ⅲａ－３類や大平式では口縁部を段状に肥厚させて文様帯とするため、文様帯の幅はそれに制限された。図４－10は口縁部下に明瞭な凸稜線を持つ点で過渡期的な特徴を持つ。阿高式出現期の文様を見ると、中尾田Ⅲａ－３類の渦文の系譜を引くもの（図５－５）、凹線間に刺突文や凹点文を施すもの（図５－７）がある。口唇部の突起に目を転じると、図５－６は台形起上に刻目を入れる大平式の要素と中尾田Ⅲ－３類の文様系譜の要素を持つ折衷的な土器である。

以上から中尾田遺跡の阿高式には中尾田Ⅲａ－１類・中尾田Ⅲａ－３類・中尾田Ⅰ類（並木式２類）の３系譜があり、並木式２類の変容のみによって阿高式が成立するのではなく、先行型式の地域的差異によって阿高式出現期の土器内容が異なる可能性が高い、と判断せざるを得ない。よって次節で阿高式系土器群の展開を述べるに当たり、各土器型式群の文様系譜名を簡略し、中尾田Ⅲａ－１類・中尾田Ⅲａ－２類（大平式）・中尾田Ⅲａ－３類・並木式の文様系譜を、順にＡ系譜・Ｂ系譜・Ｃ系譜・Ｄ系譜としておく。

3　阿高式系土器群の展開

(1)　南 九 州

ここでは地域が異なるが、出土土器の内容の差異を明らかにするため、中尾田遺跡（報文での「第Ⅱ類土器」）と鹿児島県曽於郡末吉町宮之迫遺跡（長野・井之上1981）の検討を一括して行う。

まず器種の設定について説明する。器種は文様帯の区分法と、文様帯の位置・構成と、文様帯内の文様意匠の系譜との組合せによって設定する。文様帯の区分法には隆帯・凹（沈）線や口縁部の肥厚によって各々区分する場合があり、後者が後出の要素である。文様帯の構成は各地域共通して１～４類が存在する。１類は口縁部から胴部上半まで幅広いⅡ文様帯を持つ。２類は口縁部から胴部上半までの施文範囲を占め、Ⅰ・Ⅱ文様帯を持つ。３類は口縁部にⅠ文様帯のみを持つ。４類は口縁部から胴部以下まで施文し、Ⅰ・Ⅱ文様帯を持つ。なおここではⅠａ文様帯の有無は問わない。以上の文様帯の構成の変遷を想定したものが図２（ｐ．37）である。１～４類には土器文様の系譜とその連続が認められるが、時として文様帯の構成の分類を越える場合も生じる（ｐ．37，表５）。しかし地域を越えてⅠ～Ⅳ類の４器種の消長が存在することがわかる。器種の呼称は器種名（Ⅰ～Ⅳ類）と系譜名（阿高式系土器群ではＡ～Ｇ系譜、表５）を併記する（ｐ．38，図３）。

阿高式系土器群の文様帯を限定する器種Ⅰ～Ⅲ類と全面施文の器種Ⅳ類とは、遺跡での出土状況や折衷土器の存在から、時間差にはなり得ない。なおⅠ文様帯が無文の場合もあるが微量であり、器種Ⅱ・Ⅳ類のⅠ文様帯の省略型か器種を構成しない例外的な事例であるとみなし、ここでは取り扱わない。次に各器種の文様帯の変化に着目する。

中尾田Ⅱ類の大半や宮之迫遺跡出土土器の一部を見ると、器種Ⅰ類のⅡ文様帯は帯状に展開する（宮之迫遺跡１段階；以下時期区分を表す際には「遺跡」を省略）が、大半の宮之迫遺跡出土土器（図５－４）ではⅡ文様

帯上端線を引いた後に文様帯内の文様意匠を描く新しい要素が認められる（宮之迫２段階）。ここでは文様帯の割付のための本来的な下端線は存在しない。なおⅠ文様帯とⅡ文様帯を分離させる区画線を持つ土器（図６－１，２）が少なからず存在（宮之迫３段階）し、阿高式併行の後続型式に一般的である。

Ⅱ文様帯の文様意匠を見ると、両遺跡でＣ系譜を引く幾何学文が共通するが、宮之迫遺跡ではＢ系譜を引く多重連弧文（図５－３）や渦巻文（図６－２）、区画文等が存在する。

以上の検討の結果、中尾田遺跡と宮之迫遺跡は阿高式成立期に共通する文様帯・文様意匠を共有しているものの、阿高式出現以前の「土器組成」（林1991ｐ．94）が異なっていた（具体的には異系統土器である並木式の有無を指す）ため、それらの系譜を引く文様意匠や器面調整に差異が認められた。従って阿高式の成立当初から南九州西北部と南九州東部とは地域差を有していることが判明した。

宮之迫３段階以降の文様帯はそれ自身の変化がないため、文様帯内の文様意匠の変遷を基に細分する必要がある。ⅡＢ類の渦巻文はⅡｂ文様帯の付加によりⅡ文様帯が押し上げられ、渦巻文が退化・消滅して「長靴文」（前川1979ｐ．50）に変容する。Ⅰ文様帯は阿高式特有の交互凹点文が二枚貝刺突文に変容するが、先の上昇と連動して上退の方向に向かう。ただし各文様帯は個別に組み合されるので、一部の文様帯が欠如したり、古い文様要素が残存することも生じる。このことは次に述べる「成川タイプ」（水ノ江1993）併行まで二枚貝刺突文を残存する中原遺跡例（新東1985第65図－516，517）が物語っている。

鹿児島県揖宿郡山川町成川遺跡（出口・繁昌1983）では長靴文を描くⅡＢ類（図６－３，５）と、「音符状文様」（松永1989ｐ．27；以下「音符文」と略称）を描くⅡＥ類（図６－６）とがセットとなって共存している。両者の系譜は異なり、長靴文は在地型式である宮之迫３段階の渦巻文の系

譜（Ｂ系譜）、音符文は異系統土器を模倣した可能性（Ｅ系譜）が指摘できる。音符文の変遷に関して両遺跡の様相を比較すると、南部の成川遺跡では手抜きの手法が発端となって文様意匠の崩壊が認められるが、東部の中原遺跡では異系統土器のⅡ文様帯の文様意匠を模倣するので、文様意匠の崩壊は認められない。ただし両遺跡共に長靴文に関しては文様意匠の崩れが認められ（図６－４）、多様な文様のバリエーションとして表現されている。

(2)　中 九 州

中九州における阿高式は、ＩＤ類・ⅢＡ類と同時にⅡＤ類・ⅣＣ類をも合わせ持つ。ⅡＤ類はＡ系譜のＩ文様帯とＤ系譜のⅡ文様帯との重畳、一方のⅣＣ類はＡ系譜のＩ文様帯とＣ系譜のⅡ文様帯との重畳による。

まず文様帯の変化について述べる。ＩＤ類には帯状に施文（図５－２）する場合（１段階）と、Ⅱ文様帯上端線を引いた後に文様帯内の文様意匠を描く場合（２段階）とがあるが、後者が新しい要素である。ⅡＤ類はⅡ文様帯上・下端線を引いた後に、ⅣＣ類（図５－７，８）は上端線を引いた後に文様帯内の文様意匠を描くという書き順が認められ、以後踏襲される。なおⅡＤ類はⅡ文様帯の上昇によりＩ文様帯が狭小化する。

次に文様帯内の文様意匠を見ると、ＩＤ類・ⅡＤ類は２本で１単位の蕨手文を用いた縦位文様（図５－２）から横位文様に変化し、さらにⅡＤ類は蕨手文が退化して入組文（図５－10）となる。蕨手文間を充塡するＴ字文・逆Ｔ字文は独立した文様装飾となり、退化する。これらの文様要素はまた器種を越えて使用されるため、器種間の併行関係を証明する良好な材料でもある。ⅣＣ類では同心円文間を充塡する蕨手文・逆Ｔ字文が退化して入組文となる一方で、同心円文は間延びして幾何学文へと変容する（図５－７→８）。

阿高式に後続する南福寺式の器種構成は、ⅡＤ類・ⅢＡ類・ⅣＣ類から

成る。ⅡD類（図6－7，8）は口縁部下のケズリによってⅡ文様帯の下端線が消失する一方でⅠ文様帯も消失に向い（図6－7）、代わりにⅡ文様帯がⅠ文様帯として成立する。ⅣC類（図5－8）はⅠ・Ⅱ文様帯を分離させ幾何学文を描く点から南九州東部の影響を、一方で「篦削文」（川崎1992）や鉢形（図6－9）や突起・把手の急増が目立つ点から、西北九州坂の下式（川崎1991ｐｐ．486，487）との関連をも感じさせる。

阿高式の新相では入組状の渦巻文を中心文様として入組文を横走させるが、南福寺式では渦巻文は退化して「S字状文」（乙益・前川1979ｐ．25）・「逆S字状文」（田中1979ｐ．15）と化し、入組文は萎縮（図6－7）ないしは平行化する。なお南福寺式に後続する出水式ではS字状文は列点文（図6－8）や短沈線文で表現される。

口縁部形成法の面からみれば（図1）、南福寺式の標識遺跡である熊本県水俣市南福寺貝塚（寺師1939）下層土器は、器面調整で生じた屈曲ないしは肥厚する(A手法)面をⅠ文様帯とした。しかし出水式では主に口縁部に粘土紐を貼付して生じた(B・C手法)外面をⅠ文様帯とする相違がある。

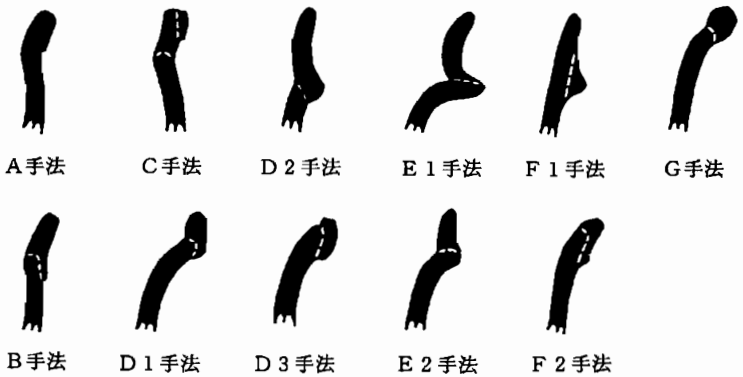


図１　口縁部形成法の模式図

ここで出水式の標識遺跡である鹿児島県出水市出水貝塚（松藤編1990）出土出水式（図7－8，9，10）の分析を行う。器種構成は南福寺式のそ

れを踏襲するが、ⅣG類（図7－9）の系譜は異なり、特殊な状況下で成立するため、局地的な分布状況を示す。先の口縁部形成法の分類をさらに詳しく分析すると（図1）、口縁部の斜外方に粘土紐を貼付して口縁部を形成させ土器内面に凸稜線を成す（B手法）ものと、B手法の外側にさらに粘土紐を付加して口縁部を形成するため土器内外面の稜線のずれが生じる（C手法）ものとに分けることができる。両者は時間差と見て良いので前者を出水式1段階、後者を出水式2段階とする。ただし後者はやはり局地的な分布を示す。

出水式2段階併行の熊本県球磨郡五木村頭地下手遺跡（小林1967，高野・柴尾1978）では、口縁部形成法はB手法ではあるが、いずれも鐘崎式や御手洗C式を伴う。南九州でもB手法のまま出水式2段階に併行する遺跡が存在するが、市来式系土器群の成立とも深く関わるため、これについては後述する。

4　阿高式系土器群の編年

本節では前節で検討した2地域間の型式組列の併行関係を押えながら編年を行い、かつて定義された2系統（阿高式系土器・貝殻文系土器）の意義を検討する。

阿高式出現直前期では、大平式と並木式2類とが異なる地域において成立するとし、中尾田Ⅲa－3類の評価によって大平式と並木式2類が併行しうるとした。矢野健一が瀬戸内地方矢部奥田式古段階A1類d種の「三角形に近い渦文」（矢野1994p．6）と大平式との関連を指摘したように、筆者の言う中尾田Ⅲa－3類とは縦位施文、器形、Ⅰ文様帯下端の刺突列など共通点が多い。

阿高式併行（1期）では従って系譜の異なる文様意匠を生ぜしめた。B系譜を引く宮之迫1・2段階と、D系譜を引く中尾田Ⅱ類・阿高式とである。C系譜が両者に共通している点は重要で、異系統土器である中尾田Ⅲ

a－3類の南下と土器ホライズンの形成との連関を想起させる。両者の併行関係は文様帯の構成・ⅣC類の文様意匠の変化の共通点等から、宮之迫1段階と阿高式1段階、宮之迫2段階と阿高式2段階古相とが各々併行する。

2期は南九州では宮之迫3段階・成川タイプ併行、中九州では阿高式2段階新相・南福寺式・出水式1段階が展開するが、南九州西北部では両者の共存例が少なくない。1期の文様帯の構成は、宮之迫1・2段階と阿高式とではおよそ共通していたが、施文順序の相違のために、2期では相反する土器内容を生んだ。従って他地域の文様要素を取り入れたとしても、それ自身が契機となって在地土器の文様構成や口縁部形成法等の変化をもたらすことはなく、あくまで他地域土器の搬入・模倣事象に留まった。なお宮之迫3段階の文様帯構成が中九州阿高式の中で確認（図5－10）できることから、宮之迫3段階と阿高式2段階新相の同時期性を保証する。

従来の2系統観は阿高式の地域色顕現によって発生した印象が強かった。しかし南九州と中九州では各々の系譜を引きつつ独自の展開を示しており、その意味で両系統を把握することはできよう。つまり地域の諸要素を残存する過程の中で両系統が発生し、1期ではホライズンを形成しつつも、2期では地域色を顕在化していたのである。

Ⅲ　市来式系土器群の研究

1　研究史

縄文後期前葉から中葉にかけて汎西日本的に展開する土器を八幡一郎によって命名（松村ほか1932p．50）され、三森定男によって継承・発展した「縁帯紋（文）土器」は、当初加曽利E式の口縁部文様帯の退化事象として認識されていた（三森1983p．309）が、戦後の称名寺式の正当な評価（今村1977など）や山内清男の広域編年の整備（柳沢1993）によって、大きく退けられる形となった。

近年では福田KⅡ式と縁帯文土器をつなぐ土器として四ツ池式（泉・玉田1986）・広瀬土壙40段階（千葉1989）等が設定され、縁帯文土器の定義を「器形，文様帯とも口縁部が頸胴部から明確に区分」（泉・玉田1986）している点から見い出す立場と、「浮線の輪廻」（水ノ江1992註（19））という独自の編年観から、福田KⅡ式の「縄文の反転を起こしたものが現れた段階」をもって呼称する立場（西脇1990ｐ．527）とがある。

さて縁帯文土器と市来式の相違点として、三森は「縄文条痕」と「渦文」の有無、口縁部形成法の違いを挙げ、「異なった環境による」と結論づけた（三森1983ｐ．149）。これ以後両者の比較についてはほとんど検討されずに、市来式が南九州在地の中で如何に成立・展開したかという点で議論が集中する。ただし前章で述べた貝殻文系土器と阿高式系土器のいずれの系譜上に位置づけるかで見解が大きく分かれ、また両者の相互の影響を想定する場合もある（乙益・前川1969，前川1979ｐ．85）。

前者と見る立場でも、出水式（田中1982ｐ．84）、御手洗Ａ式（小林1967ｐ．183）、寺師見國の言う南福寺式（以下、南福寺上層式（西脇1990補註９）と呼称；寺師1954，西脇1990）から追究する場合等様々である。後者と見る立場では、指宿式と市来式との間に倉園式と松山式[6]を設定し型式学的な連続性を示す場合（出口・繁昌1981，本田1983など，河口1981）と、「縁帯文土器化した指宿式土器」から追究する場合[7]（松永1989）とがある。

市来式の展開については、層位学・型式学的見地からの検討（河口1957，本田1981など）が中心で、近年では市来式から新たに「丸尾式」を分離している（前迫1992）。

2　市来式系土器群の成立

本節では主題を解くに当り、その展開が最も重要な地域である南九州東南部の動向を分析する。

まず「中原ＶＢ類」（新東1985）に着目する（図７－１，２）。口縁部形成法（ｐ．10，図１）は口縁部の上方に幅狭の粘土紐を貼付して口縁部を形成させ、土器内面に凹稜線を成す（Ｄ１手法）。文様については、Ⅰ文様帯は円文を中心文様として上・下端に列点刺突文を配する。以上の２属性は在地土器の要素の中にはなく、瀬戸内縁帯文系土器の要素（ｆ系譜）である。ただしⅡ文様帯はおよそ平行四辺形の文様枠を保持し、その枠内を入組文等で充塡するものがあり、ⅡＥ類の系譜を引くものとして理解できる。つまり文様帯の区分法は在地の隆帯・凹（沈）線による区分でなく、他地域に由来する肥厚による区分であり、かつⅠ・Ⅱ文様帯の両文様意匠の系譜が異なり、多様な組合せが想定できるため、器種の呼称は器種名（Ⅰ～Ⅳ類）と系譜名（市来式系土器群ではａ，ｆ，ｈ～ｌ系譜[8]）を併記する（ｐ．38，図３）。

中原遺跡ではⅡｊ類、Ⅱｋ類、Ⅲｆ類が存在するがⅢｆ類（報文での「中原Ⅷ類」）について報文では、微量であり混入の可能性が指摘されている（報文ｐ．154）。前２者は中原遺跡が最も多く出土しており、南九州東南部に集中する。水ノ江和同が筆者の分類で言うⅡｋ類（報文での「中原ＶＢ類」）とⅡＥ類（報文での「ＶＡ類・ＶＣ類」の大半）がセットを成した可能性を指摘した（水ノ江1993ｐ．339）ように、両者のⅡ文様帯の文様意匠は類似点が多い。そこで成川タイプ併行のⅡＥ類（図７－３）のⅡ文様帯文様意匠を見ると、在地土器の文様要素にはないⅡｊ類・Ⅱｋ類の列点刺突文を施しており、これが上退して図７－４の内面施文を生成する。「方形区画」・「平行四辺形枠」（松永1989ｐ．27）の内部を充塡する入組文が退化する文様変化は、Ⅱｋ類のⅡ文様帯でも確認できることから、ⅡＢ類・ⅡＥ類とⅡｊ類・Ⅱｋ類とは器種差であり、時間差にはならない。

ここで組成の上でⅢａ類・Ⅲｆ類が主たる位置を占める宮崎県串間市下弓田遺跡（鏡山編1961・永友1991）出土土器の分析を行う。当該遺跡では

中原遺跡で出土するⅡｊ類・Ⅱｋ類が逆に微量であることからも、新しい様相を呈する。しかしⅢｆ類（図８－１など）はⅡｊ類・Ⅱｋ類の口縁部形成法（Ｄ１手法）やＩ文様帯の文様意匠が近似している。よって口縁部の上方に幅広の粘土帯を貼付して口縁部を形成させ土器内面に凹稜線を成すもの（Ｄ２手法）や、幅広の粘土帯を貼付するもの（Ｅ１手法）や、口縁部の内面上端に粘土紐を貼付するもの（Ｅ２手法）、口縁部から一段下がった所に粘土紐を貼付するもの（Ｆ手法）は新しい要素と見なしてよい（ｐ．10，図１）。Ｅ・Ｆ手法は幅広の口縁部を形成させ、Ｉ文様帯の凹線文の本数を増加させるためには結果的に都合のよい手法ではある。図８－１を見ると、円文を中心にして列点文を円形に配する特徴的な文様の組み合せがある。これらが上退して図８－２を経て口縁波頂部に縦位の刻目列などの施文や稜線を持つ（図８－３）。Ｉ文様帯の上下端の列点文は密な場合が多く、時に押引状の施文も存在する。

両遺跡出土土器を比較すると、前述したようにⅡ類からⅢ類へ主体が変容する、という１現象が理解できるが、それは単なる組成率の逆転を意味しているのではない。Ⅲａ類・Ⅲｆ類には土器内面・上面・外面に施文する土器があり、型式内のバリエーションとして理解されている（本田1983）。内面施文の土器（図８－７）は中原遺跡や下弓田遺跡では報告されていないが、鹿児島県曽於郡志布志町柳井谷遺跡（瀬戸口1984）では出土しており（報文での「柳井谷第11類」）、かつⅢａ類・Ⅲｆ類も安定した器種として存在したようである。つまり中原遺跡における在地器種と異系統土器の共存という状況から脱却して、柳井谷遺跡では器種構成の変革があったと想定できるのである。器種構成の変革とは、先行型式にはなかったⅢａ類、Ⅲｆ類と各地域のⅡ文様帯との各文様帯毎の組合せを意味するので、次に地域毎の詳細な検討が必要となる。

3　市来式系土器群の展開

市来式系土器群の土器型式の中でも、市来式は南九州を越えた広域に分布する土器型式であることが指摘されている。しかし土器型式を構成する器種と、土器製作における口縁部形成法とにおいて地域色があるため、ここで時間差と地域差を区別する。

そこで表２を見ると、Ⅲａ類とⅢｆ類は全域で共通する器種であり、Ⅲｆ類のうちＩ文様帯に凹線文を施す土器は全域で確認できる。しかし沈線文を施す土器は東南部ではほとんどなく、代わりに凹線を短く切る短凹線文を施す。逆に北部では相反する傾向を読み取ることができる。

地域・遺跡名 ＼ 土器分類		ⅡＥ類	Ⅱｈ類	Ⅱｉ類	Ⅱｌ類	Ⅲａ類	Ⅲｆ類 沈線文	Ⅲｆ類 短凹線文
東南部	丸野第２	△	―	○	△	○	―	○
	下弓田	○	△	○	○	○	△	○
中・南部	柳井谷	―	―	○	△	△	―	○
	中ノ原	―	○	○	○	○	△	△
	榎木原	―	△	△	○	○	△	○
西北部	草野・武	○	○	○	○	○	○	△
	市　来	―	―	―	△	○	○	―
東北部	麦ノ浦	―	△	―	―	○	○	―
	田代ヶ八重	―	―	―	―	○	○	―
	海蔵寺	○	△	△	?	○	○	△

―　未検出　　○　組成の中で主体を占める土器
?　細片あり　　△　組成の中で微量の土器

表２　５期の土器出土状況

Ⅲａ類とⅢｆ類に伴う器種については、西北部では異系統土器である鐘崎式や北久根山式がかなりの割合で伴う（鹿児島県川内市麦ノ浦貝塚（中島・牛之濱編1987）・鹿児島県伊佐郡菱刈町年ノ宮遺跡（新東・東1991）・宮崎県えびの市役所田遺跡（中野1993））が、他の地域では少量に留まり次に挙げる器種が補完する。東南部ではⅡｉ類・Ⅱｌ類・ⅡＥ類が、中・

南部も同様であるがこれらに地域特有の器種であるⅡh類が加わる。

次に口縁部形成法に関して、松永幸男が「「く」字形口縁土器」は東部に集中すると指摘した（松永1989p．37，1994註（38））ように、筆者の分類で言うE１・２手法は東南部のみの手法で、他地域での出土は搬入土器ないしは模倣土器の可能性がある。逆に東南部ではF手法による土器が希薄であることから、両手法は地域差として認識できる。

市来式の成立期にはⅢa類・Ⅲf類のように極めて斉一性の高い土器内容を生むが、先行する土器組成は地域によって異なるため、地域毎の成立・展開について検討する。

(1)　南九州東南部

ここでは主要器種の変遷について述べる。

Ⅲf類の口縁波頂部は①文様ないしは稜線を持つ（図８－１～３）、②稜線はなく、短凹線文を引いた後に刺突を行う（図９－４）、③稜線・刺突がなく短凹線文を描く、の３通りがあり①→③の変化が想定できる。Ⅰ文様帯の上・下端は列点文がヘラ刻目列、ついで二枚貝刺突文へと変化し、またその内部文様も単数条の凹線文から凹線を短く切る複数条の短凹線文へと変化する。以上の変化の方向は、口縁部形成法の変容（D１手法→D２手法→E１手法）とも一致する。D１手法は松山式に特有の手法であるため、D２手法の場合を市来式１段階、E１手法の場合を市来式２段階とし、２段階についてはさらに二細分（凹線文を古相、短凹線文を新相）する。なお当該地域の先行型式では土器内面に施文を行うことはごく稀であるので、内面施文と密接な関係にあるF手法の土器は他地域の搬入土器ないしは模倣土器の可能性が高い。従って東南部では口縁部形成法はD２手法からF手法を介さずにE１手法に変化し、結果的に土器内面に凹稜線を成す同一の効果を生じさせる。

Ⅲa類でも口縁部形成法のF手法は微量であり、D２手法からE１手法

に変容し、粘土帯の幅が狭小化（Ｅ２手法）する。

Ⅱｉ類（図９－11）とⅡｌ類（図９－９）のうち、前者の文様帯の構成はⅠ文様帯がⅢｆ類のⅠ文様帯、Ⅱ文様帯がⅢａ類のⅠ文様帯の重畳で、Ⅰ文様帯の施文順序の変容を契機として、Ⅰ文様帯上端の刺突列、内部文様の順に上退・消失し（図10－３）、下端の刺突列とⅡ文様帯の刺突文が残存する（図10－４）。後者は先のⅢｆ類のⅠ文様帯の変化に対応する。以上の両器種の変遷は中・南部でも同様の傾向が伺える。

ⅡＥ類（図８－８，図９－12，13）は東北部では瀬戸内系磨消縄文土器を伴わなかったために独自の展開を遂げ、Ⅱ文様帯の上端線は区画線として機能を脱し、上端線以下の文様と共に短凹線文ないしは区画文を構成する（図８－８）。文様変化の方向としては短凹線文の直線化、Ⅱ文様帯の上昇といった傾向がある。

(2)　南九州中・南部

南部に位置し成川遺跡に近接する鹿児島県指宿市橋牟礼川（指宿）遺跡（濱田1921）下層土器は、指宿式の標識資料であり両遺跡の引き算によって時間差を見い出すことができる。同様に、中部に位置する鹿児島県鹿児島郡桜島町武貝塚でも1989年調査の試掘坑１混貝土層（泉ほか1991）と1949年調査の小林調査区Ｖ層（寺師1954，水野・小林1959）においても年代的地点差が確認できる。成川タイプ併行において中・南部では文様意匠の変化に微妙な差異があるが、後続の指宿式では土器内容においてほとんど違いを見い出すことができない。

指宿式の特徴のうち、土器内面の凸稜線は出水式の口縁部の形成で生じるそれを模倣した可能性があり、内面施文はⅠａ文様帯の刺突文・沈線文が内面に移動した中原遺跡ⅡＥ類（図７－４）などに出自を求めることができよう。小林調査区Ｖ層出土土器は、若干の混入土器を除くと大部分は指宿式の良好な資料である。指宿式Ⅱ文様帯の文様意匠はⅡＢ類の系譜を

引く長靴文崩れや蛇行文などがあり、また円文から垂下文様を展開する図7－7は東部のⅡE類のⅡ文様帯と類似する。

武貝塚では小林調査区Ⅴ層と1989年調査の試掘溝2貝層下土層（泉ほか1991）でもなお、出土土器の内容が若干異なる。後者には前者以前の土器も混じってはいるものの、前者にはない要素であるⅠ文様帯とⅡ文様帯の重畳を成す土器が存在する（図8－9）。Ⅰ文様帯がf系譜に由来していることは明らかで、Ⅰ文様帯の一致により、Ⅱ文様帯を省略する松山式とセットを成す。このⅡk類はⅠ文様帯をⅡ文様帯に転移してⅡl類（図8－5，10）となる。

松山式から市来式にかけてのⅢf類やⅡl類の変化については、東南部のそれと同様であるが口縁部形成法が異なり、Dl手法からFl手法へ変容する。またⅢf類のⅠ文様帯の文様意匠は凹線文から沈線文に変化し、施文順序の変容を契機として上・下端の刻目列が消失する。以上を整理すると、市来式1段階にF手法が取り入れられ、2段階古相までは文様も他地域と類似するが、2段階新相では沈線文に変化する（図9－2）。

Ⅲa類（図9－5，6）は口縁部形成法の差異によって次のように細分できる。D1手法から、口縁部から一段下がった所に粘土紐を貼付し正面からナデを加えるもの（F1手法：図9－5）、横からのナデを加えて突帯状の形態を成すもの（F2手法）を経て、口縁部に粘土紐を痕跡的に貼付するもの（G手法；図9－6）に変容する。指宿式には出水式ⅢA類を伴うことが少なくなく、この系譜の延長として位置しつつ新たな口縁部形成法（D1手法）を取り込んだと想定できる。

Ⅱh類（図9－10）は突起や橋状把手を貼付することが多い器種で、これらを回避しながらⅡ文様帯を施文し、さながらⅢf類のⅠ文様帯と同様に凹線文を切って描く。しかし突起や橋状把手の退化（Ⅲf類ではつまり口縁波頂部の稜線の消滅に対応しよう）によって凹（沈）線文をつないで描く。

ⅡＥ類（図９－12，13）もまた、Ⅱｈ類の突起に類似したそれを貼付することが少なくない器種である。しかしⅡ文様帯の施文後の突起貼付という特異性とⅡｈ類のⅡ文様帯の文様意匠の変化の方向とを勘案すると、両者を時間差とみることはできない。東北部では出水式新段階の土器の中に、施文後に粘土紐の装飾を貼付（田代ケ八重遺跡、吉本1992図19－63）する土器も散見するところから、そうした地域の要素を色濃く残存しているものと推測できる。つまり中・南部においてⅡＥ類とⅡｈ類とは、明らかに突起に関する土器の作り分けが存在するのである。このように考えることが許されるならば、ⅡＥ類は本来東北部の特有な器種であった可能性があると言える。既述したように文様意匠は直線化し、Ⅱ文様帯が上昇（図９－13）、刻目ないし二枚貝刺突文のみが残存する。すなわち丸尾式ⅡＥ類の成立である。

ここで市来式の器種の組合せの検証を行う。Ⅱｉ類以外では文様が凹線文から短凹線文ないしは沈線文に変化するという点で、各器種の併行関係が概ね把握できる。また内面施文の時間的序列の中で二枚貝刺突文の場合が新相かつ極めて稀であるが、その場合に同一の内面施文を共有する各器種（図９－２，10）は年代的に近接するとみて良く、また図10－４は市来式に後続する丸尾式に相当するので残る２者は市来式の新相を示す。よって２つの変化の想定は首肯し得よう。次に突起に着目する。突起はⅡｈ類やⅡＥ類に通有ではあるが、時として他の器種にも貼付し、器種間の同時期性を示す。中でもⅡＥ類の施文後の貼付という特異な要素はⅢａ類（図９－６；Ｇ手法）にも確認でき、年代的１接点を見い出せる。

(3)　南九州北部

鹿児島県日置郡市来町市来貝塚（新東・児玉1993）４－Ｆ区出土土器の内、明らかに年代的に後出する土器を除くとおよそ出水式新段階（口縁部形成法はＢ手法）・指宿式類似の土器と南福寺上層式とで占める。前者と

後者との間には型式学的な隔たりが大きい。

南福寺上層式にはII文様帯を持つ器種がなく、IIIa類（図8－13）とIIIf類（図8－11，12）とで構成する。IIIf類には沈線文のみのもの（図8－11）や擬縄文帯と無文部が逆転したもの（図8－12）がある点で東南部における松山式の文様系譜や文様変化とは異なる。後続する市来式では従来のIIIa類とIIIf類に加えて、異系統土器である鐘崎式が新たに加える。

IIIa類とIIIf類の変遷は中・南部と基本的に同様ではあるが、IIIf類は沈線化するものの口縁波頂部に北久根山式系の突起を付加することが多い（図9－3）。以上の3器種でもって土器組成を成すために、他の2地域のみで出土する器種は搬入土器ないしは模倣土器と見て良い。

本地域の市来式の器種の組合せは、IIIa類とIIIf類に関してはおよそ中・南部と一致をみる。異系統土器（鐘崎式・北久根山式）との共伴関係については、今後の資料の増加と相互の編年の整備に委ねるところが大きい。

4　市来式系土器群の編年

ここでは前節で述べた地域間の併行関係を押えながら編年を構築し、合わせて土器型式が示す地域的現象に若干の考察を加える。

3期は東部西南四国の縁帯文系土器の流入が契機となって、個々の地域の結束が急速に高まったと推測する。該期は中原V類（東南部）・指宿式1段階（中・南部）・出水式2段階（西北部）に相応し、武貝塚小林調査区V層で後2者の共伴が明確であるので同時期とみなせる。中・南部では指宿式1段階に出水式2段階の文様要素を取り入れたり、両者の折衷土器も散見することから、土器組成における異系統土器のあり方が質的に変化したことがわかる。東南部と中・南部とを比較すると、前者では西南四国縁帯文系土器と在地器種との折衷土器であるIIj類・IIk類と在地器種のIIE類とを合わせ持つが、後者ではIIB類・IIE類を持つに留まる。つまり東部のIIj類・IIk類自体は広範な展開を見せないものの、その文様要

地域 / 時期区分	南九州 東	南九州 中・南	南九州 西北	中九州	瀬戸内 西南	瀬戸内 中	近畿
直前期	大平式		並木式２類			矢部奥田式(古)	北白川Ｃ式(1) 北白川Ｃ式(2)
1 期	宮之迫(１)		阿高式(１)			矢部奥田式(新)	北白川Ｃ式(3) 北白川Ｃ式(4)
	宮之迫(２)		阿高式(２)				中津式
2 期	宮之迫(３) 成川タイプ		南福寺式 出水式(１)		宿毛式Ｉ群６類 宿毛式(中)		福田ＫＩＩ式
					宿毛式Ｉ群 8，9類 三里式(ａ)・平城ＩＩ式(１)	松ノ木式(古) 松ノ木式(中) 松ノ木式(新)	〈四ツ池式・広瀬土壌 40段階〉
3 期	中原Ｖ類	指宿式(１)	出水式(２)				
4 期	松山式・指宿式(２) 市来式(１)			鐘崎式	平城Ｉ式	彦崎ＫＩ式・(津雲Ａ式)	北白川上層式(1)
5 期	市来式(２)古 市来式(２)新			北久根山式	平城ＩＩ式(２) 片粕式	彦崎ＫＩＩ式	北白川上層式(2) 北白川上層式(3)
6 期	丸尾式・納曽式			辛川ＩＩ式	広瀬上層式		一乗寺Ｋ式

宿毛式・松ノ木式の細分は前田1994，瀬戸内中部中期末の細分は矢野1994，後期中葉の細分は鎌木・高橋1965，近畿編年は千葉・菱田編1991を参照した。

表３　編　年　表

素を取り入れたＩＩＢ類・ＩＩＥ類が中・南部の指宿式の成立に密接に関連しているのである。

４期では松山式・市来式１段階へと変容し、ＩＩＩａ類・ＩＩＩｆ類が全域で共通する器種となるが、これらに伴う器種が地域によって異なる。これは一方の地域がＩＩ文様帯に古い要素を残存させるのに対し、他方はＩ文様帯の転移が行われたためである。つまり南部では逸早く器種構成の変革を引き起こし、その動向に触発されて周辺地域で搬入・模倣事象が生じ、短期間の内にホライズンを形成したと推測できる。４期の比較的短期間の土器拡散は、北限は長崎県諫早市有喜貝塚（松藤編1990）、南限は沖縄県浦添市

浦添貝塚（新田1971）まで確認でき、特定の器種(Ⅲｆ類・Ⅱ１類)に限定されている点は興味深い。

５期は市来式２段階に相応する。西北部では主体となる２器種に異系統土器が加わるが、他の地域では多様な器種の生成を生ぜしめた。個々の器種を東南部と中・南部で比較すると、口縁部形成法の相違はあるものの２段階古相では各器種は極めて類似性が高いが、２段階新相では文様変化の共通する器種（Ⅱｉ類・ⅡＥ類）と、独自の変化を示す器種（Ⅲｆ類・Ⅱ１類）とを合わせ持つ。すなわちホライズン形成以後も地域間で継続して交流があるものの、地域の個性も存在したのである。

６期は丸尾式に相応する。５期の２段階新相で出現した個性の強い器種に代わって、地域間で共通する器種（Ⅱｉ類・ⅡＥ類）が再びホライズンマーカーとして台頭する。丸尾式には異系統土器（辛川Ⅱ式；図10－８）やその在地型として出現する納曽式（図10－９，10）を伴う点から見れば、その成立が外的要因による可能性は否定できるものではない。市来式系土器群の終末と異系統土器・無文土器の急増は、南九州後期中葉の土器組成の崩壊を意味すると共に、後期後葉に向けての新たな胎動を感じとることができる。

Ⅳ　瀬戸内系磨消縄文土器の伝播事象と受容形態

前章までの考察の結果、南九州では瀬戸内系磨消縄文土器の波及が在地土器に与えた影響は少なくないことが判明した。そこでまず松山式の成立を語る上で不可欠である西南四国縁帯文系土器の検討を行い、合わせて瀬戸内系磨消縄文土器が南九州においてどのような形で伝播・受容され、土器組成の中で消化されていったかについて検討する。

１　西南四国縁帯文系土器の再検討

従来、西南四国では東九州との密接な関係の中で平城Ｉ式が成立し、平

城II式を介して片粕式に移行するとされた。近年ではこの従来説に対し、平城Ⅰ・II式の逆転説の立場（西脇1990，宮本1990，水ノ江1992，千葉1992）と従来説を継承・発展する立場（前田1993，犬飼1993）との間で論争が繰り広げられている。また後期中葉編年の見直しの必要性が指摘（阿部1994，出原1992）されるなど、縁帯文土器の成立・展開をめぐる研究者間の見解は一致を見ていない。

まず鎌木義昌・西田栄の言う第2類土器（鎌木・西田1957）と、犬飼徹夫（犬飼1976）の言う第2類土器と、木村剛朗（木村1982）の言う第2群土器との比較を行う。後2者が片粕式第1類（木村1974）につながる要素を見い出した所謂平城II式と呼称されたものを概観する（図11－10）。口縁部形成法は口縁部から一段下がった所にわずかに粘土紐を貼付している（p．10，F2手法）か、もしくは頸部のミガキによって口縁部に凸稜線を成しているもの（A手法）である。土器内面に施文を行うものは少なくなく、II文様帯の逆三角形文様や縄文地上の施文は片粕式への連続性を示している。

一方前者が示した土器は、一方から他方へ入組文を横位展開するという特徴を持つ。こうした土器の類例は水ノ江が「小池原下層II式古段階」（水ノ江1992）とする福岡県築上郡大平村土佐井遺跡出土土器（図11－5）などが該当する。

なおこの他に所謂平城II式とは異なる要素を持つ土器の例として、図11－7がある。これを見ると口縁部形成法は口縁部上方に粘土紐を貼付して口縁部を形成させており（p．10，D1手法）、土器内面に凹稜線を成している。Ⅰ・II文様帯は波頂部下で文様が異なり、単位文様の繰り返しとは趣を異にする三里式a類と理解したい。

従って平城II式には三里式a類と土佐井例と所謂平城II式との3者が混合しているため区別する必要があり、便宜上順に三里式a類、「平城II式1類」、「平城II式2類」と呼称する。

さてここで、縁帯文土器成立期に位置する松ノ木式（出原1992）に着目する。有文深鉢を大きく三分すると、口縁部上面・内面に粘土紐を貼付して施文を行い、頚・胴部以下にも文様帯を持つ土器（報文での「上面施文型」・「内面施文型」）と、口縁部外面に粘土紐を貼付して（口縁部形成法Ｄ１手法に相当する）施文を行い、頚・胴部以下にも文様帯を持つ土器（報文での「外面施文型」）と、口縁端部のみに施文を行う土器[9]（以下「口縁端部施文土器」と呼称）とがあり、有文浅鉢が高い比率で伴うことが大きな特徴である。このうちの口縁端部施文土器（図11－２）と有文浅鉢（図11－１）とは、愛媛県北宇和郡広見町岩谷遺跡（犬飼・十亀ほか1979）では三里式ａ類に伴い、高知県幡多郡大月町尻貝遺跡（前田ほか1991）では両者共に報告されておらず、代わりに平城Ⅰ式・Ⅱ式２類が縄文地の鉢と伴出している（表４）。

地域・遺跡名 ＼ 土器分類		口縁端部施文	有文浅鉢	三里式ａ類 平城Ⅱ式1類	平城Ⅰ式	平城Ⅱ式 2類	松ノ木式	縄文地鉢
瀬戸内	なつめの木	○	○	―	―	―	○	△
中部	松ノ木	○	○	―	―	―	○	―
西南	岩　谷	○	△	○	―	―	―	(△)
四国	三　里	○	―	○	―	△	―	(△)
	平　城	△	―	○	○	○	―	○
	尻　貝	―	―	―	○	○	―	○

―　未検出　　○　組成の中で主体を占める土器
（　）他の時期に伴出する可能性を示す　　△　組成の中で微量の土器

表４　南西四国の土器出土状況

三里式ａ類（図11－６）の文様は、宿毛式の区画文の系譜を引くという前田光雄の説（前田1994）がある。ただし三里式ａ類の中の外面施文型（木村1984第10図－１・３）の口縁部形成法はＤ１手法で図11－７と同一であって、伴出土器の一致からも両者に大きな時間差を見い出せない。以上の点と分布状況の相違から、三里式ａ類と松ノ木式とは地域差であった

可能性が高い。

なお口縁部形成法からみれば、平城Ⅰ式では、三里式ａ類のＤ１手法よりも外側に粘土紐を貼付して土器内面に凹稜線を成し（ｐ．10, Ｄ３手法）、平城Ⅱ式２類ではＦ２手法・Ａ手法へと変化し、口縁部に貼付する粘土紐の位置が外側へ下降ないしは省略の一途をたどると想定できる。これにより外面施文は瘤状突起を介することもなく、土器内面の凹稜線を文様化した内面施文と「完全に分断され」（犬飼1993ｐ．28）る。Ⅱ文様帯はＪ字文が崩れ、狭義の磨消縄文が縄文地上の沈線文に変化する。ただし逆三角形文様は鉢のⅡ文様帯が転移したもので、この文様系譜上には位置しない。福岡県春日市柏田遺跡の例（図11－９）では波頂部間に逆三角形文様を配しており、両者の折衷的な土器であることを示す。

平城Ⅰ・Ⅱ式の逆転・非逆転という議論は、平城Ⅱ式の定義が曖昧のままに進められてきた。本節ではこの問題が本稿の内容から外れるため詳細な検証を行わなかったが、これまでの議論とは異なる視点から若干の検討を加えた。

2　南九州における受容形態

九州縄文後期土器が瀬戸内系磨消縄文土器を伴い、その影響を多分に受けつつ変容するという図式は多くの先学によって指摘されてきた。しかしどのように伝播し受容したかを具体的に示した論考は数少ない。そこでまず九州で瀬戸内系磨消縄文土器がどのような経路で流入したのか検討する。

中期末の矢部奥田式系および後期初頭の中津式系は北・東・中九州で散見するが、南九州では殆ど聞かない。北九州では並木式２類との折衷土器（図４－６）も確認できる。両型式の分布は北九州を経由して拡散した形態を示す。

しかし後続する福田ＫⅡ式系・宿毛式系は、分布・数量共に圧倒的にこれら２型式を凌駕する。福田ＫⅡ式系（図12－５）は目下南九州中・南部

以外の各地で、宿毛式系（図12－１～３，６，７）は東九州と南九州東南部で報告がある。福田KⅡ式系と宿毛式系は時間差ではなく地域差であることを考慮すれば、九州での両型式の分布上の相違は伝播経路の差異を示している、とも解釈できよう。つまり宿毛式系は豊後水道や日向灘を直接横断してもたらされたと推測できる。

次に南九州における瀬戸内系磨消縄文土器の拡散状況と受容形態について概観する。

宿毛式系はほぼ全域で散見するが、中でも東南部の中原遺跡は長期に渡り、一定量を占める。既述したように宿毛式系（前田の言う宿毛式中段階）の文様意匠（図12－１～３）を複写した器種ⅡＥ類（図６－６）が成立、在地器種ⅡＢ類と共存する。東南部と南部以外の地域では若干量宿毛式系（図12－６など）を伴出するのみで、在地器種がそのまま展開する。あるいはⅡＥ類を搬入・模倣する場合や、宿毛式系を擬縄文で模倣表現する場合も少なくない。

図12－９は器形・口縁部形成法（Ｄ１手法）・器面調整・文様帯の構成・文様意匠から見て松ノ木式新段階に併行し、かつ口縁部形成法の模倣は困難であるため、松ノ木式分布圏から人が移動して当所にて製作したもの、と推測する。また図12－８についても同様な推測が成り立つ。ただしいずれもⅡ文様帯文様意匠そのものは、在地器種のそれを採り入れた折衷的な土器である。この松ノ木式系は南九州では中原遺跡以外にその出土例を知らない。中原遺跡では、松ノ木式系の主に口縁部文様の要素を部分的に取り入れた器種ⅡＥ類が、ⅡＢ類の代わりとして機能する。

一方松ノ木式系の口縁部の形態や文様要素を複写したⅡｋ類が新たに成立し、両者がセットとなり共存する。他地域に対しⅡｋ類は南九州東北部や大隅諸島に、ⅡＥ類は南九州中・南部に搬出・模倣されるものの、松ノ木式系自体のそれはなかったようである。中・南部ではⅡＥ類は異系統土器として存在し、在地器種は部分的にその文様要素を取り入れる（指宿式

ⅡE類）。

つまり東南部では瀬戸内系磨消縄文土器が土器組成の中で1器種を成し、さらに在地器種との折衷による新たな器種の生成を生じ、中・南部でも後者の継続的な伝達により在地器種に新たな要素の付加を漸次与える。ただし中・南部の中で円滑な伝達を成し得なかった場合には、土器内容の相違が生じる。最も影響が希薄な地域であった西北部は、残る2地域からの伝達が単発的であり、土器型式を変容させる程の原因には至らない。

さて土器製作の上で規制される社会的規範の中には、地域・集団を越えて、同一の器種を共有することも内包されようが、その器種構成の変革は、社会的背景と密接な関連を持つと推測できる。このような視点で松山式の成立・市来式の展開の様相に立ち戻って考えた場合、南九州では隣接する3地域が特定の数器種を共有する意味ではホライズンを形成しつつ、各々の個性は何等かの形で潜在的に存在していたと見るべきである。その好例が南九州西北部で、異系統土器である鐘崎式・北久根山式が市来式と共に土器組成の中で重要な位置を占めその影響さえも甘受するが、一方の中・南部の在地器種については短発的な搬入・模倣事象に留まった。従ってホライズンマーカーとしての数器種は出水式を包括する形で受容され、中九州との地縁的結合が依然として続いていたと理解できる。

V 終　章

本稿では、土器型式における文様系譜の「地方的連続」（V.G.チャイルド1981p.79）と器種構成・土器組成との視点から、南九州を中心に微視的な視野で編年を行い、阿高式系土器群と市来式系土器群を暫定的な時期区分として1～6期に区分した（p. 22, 表3）。この時期区分をホライズンと「中間期」（Intermediate Period；泉1971p.199）の反復事象という、評価による「段階設定」（小杉1988p.105）で置き換えるならば、1・4・6期のホライズン形成期と2～3・5期の中間期に区分・表現で

きよう。本章では、1期のホライズン（以下「阿高ホライズン」と呼称）と4期のホライズン（以下「松山ホライズン」と呼称）の形成・崩壊過程及びその背景を比較・検討して、本稿のまとめとする。

阿高ホライズンでは、器種構成とA系譜（中尾田Ⅲa－1類の文様系譜）・C系譜（中尾田Ⅲa－3類の文様系譜）の共有というレベルでホライズンを形成する。A系譜は春日式に由来するが、C系譜は中尾田Ⅲa－3類に由来する。後者は北九州では並木式2類に伴う異系統土器として客体的な存在であったが、一方の南九州では在地土器の文様構成を大きく変換させている（大平式縦位文様）。また異系統土器と在地器種との折衷事象が複数存在する点を評価するならば、中尾田Ⅲa－3類を包括する形で大平式が主体的に変容して、阿高式を成立せしめたものと理解できる。つまり中尾田Ⅲa－3類の拡散の経由地域である北九州は、南九州阿高式・宮之迫1段階の成立を付与したと同時にその拡散を受容して、結果的に九州全域を対象としたホライズンが形成されたのである。このようにホライズン形成を発生させる要因となる特定の土器型式を「発生要因」と呼び、その送り側が逆に受容側の影響（土器型式の拡散）を被ってホライズンを形成する現象を「フィードバック現象」と呼んでおこう。

一方松山ホライズンでは、Ⅲa類・Ⅲf類という共通する器種を共有するレベルでホライズンを形成する。松山式の成立は次の2要素が必要であったと想定する。第1は東南部の異系統土器の流入が完全に停止して、従前のように異系統土器に関する情報が在地器種に付与されず、在地的変化を開始する。第2は中・南部以北の阿高式系土器（出水式）の流入である。異系統土器の流入に端を発する松山式Ⅲf類（南九州在地型式）と阿高式系土器（異系統土器）の末裔としての松山式Ⅲa類との組み合せと、後続型式である市来式（南九州在地型式）と鐘崎式（異系統土器）との組み合せとは、現象としての共通点が看取され、背景となる社会状況を知る上で興味深い。つまり松山式の成立は宿毛・松ノ木式分布圏との不接触を契機

とした中九州以北地域との地縁的結合の醸成であり、これにより両者の有機的関係は持続されるのである。

従って松山ホライズンの発生要因は、南九州西北部出水式の南下事象そのものであった可能性が高く、南九州東南部ではこれを受容・包括して器種構成の変革を生じさせたのである。南九州以外に目を転じ、見通しとして述べるならば、近年の資料の急増により松ノ木式（新段階）系の汎西日本的な展開が知られつつあり、これらが汎西日本に展開する縁帯文土器の発生要因となる可能性は多分にあろう。南九州ではこの発生要因を受容しているものの、何らかの原因で松ノ木式分布圏との接触が途絶え独自の展開へと進む。松山式・市来式が非縁帯文土器である所以である。

以上の両ホライズンは発生要因とホライズンマーカーが必ずしも一致しない。発生要因が核となる地域で主体的に受容され在地化した後に隣接・周辺地域にホライズンマーカーが波及し、さらに地域毎でそれを主体的に受容しつつホライズンを形成するため、地域における「個」としての独自性は維持される。なお松山ホライズンは東九州地域の土器ホライズンと相対するため中九州内陸部には及ぶことがなく、その視点は八代海沿岸域や南西諸島に向けられた。この点で「市来式土器文化」が「海洋的性格をもった文化」という指摘（本田1981）は的確である。

さて「ホライズンマーカーが迅速に拡散し、地域文化に短期間浸透」（J. Newcomer 1982）した後の中間期は、土器型式の地域色が顕在化する時期である。阿高ホライズンの崩壊の端緒は文様帯区画線の施文順序の相違によるものである。ホライズン形成期では土器文様に対する地域間の影響を認めることが出来るものの、上記の理由が大きく作用し一方が他者を異なる規範の集団と認識することによって、土器型式分布圏の分化が明確になったと解釈できる。一方の松山ホライズンの場合、形成当初から器種構成そのものを変革する地域と先行土器型式の器種構成に組み込んで消化する地域との両者が存在するため、地域の個性は器種の多様性となって

現出した。しかしいずれの場合も、拮抗する排他的な性格の地域色としてではなく、有機的な分散形態としての地域色であり、その結果新たなホライズンマーカーを主体的に受容し再び結合を高めることは決して困難ではなかったのである。　（平成７年12月18日稿了）

（平成6年度文化財史料学専攻修了・財団法人岐阜県文化財保護センター勤務）

本稿は平成７年１月に奈良大学大学院に提出した修士論文の骨子をまとめ直したものである。執筆するに当たり、学部在籍時より多くの方々の御指導・助言を賜り、遺物の見学・実測・文献収集等で大変お世話になりました。また土器実測図（縮尺は不同）の多くは報告書・論文等を転載させて頂きましたが、いずれも紙幅のため御芳名及び出典名は割愛しました。末筆ではありますが御礼申し上げますと共に、御寛容願いたく存じます。

なお未発表資料の掲載について次の先生、諸機関に快諾を頂きました。合わせて御礼申し上げます（順不同、敬称略）。

泉　拓良（武貝塚）　鹿児島県教育委員会（山の中遺跡）　熊本県教育委員会（黒橋貝塚）　えびの市教育委員会（役所田遺跡）

また日頃から御指導を頂いている坪井清足先生、水野正好先生、泉拓良先生には特に感謝の意を表します。なお本文中での敬称は省略させて頂きました。御了承下さい。

註

1）里木貝塚出土土器の中に異系統との折衷土器がみられ、「舟元、里木の一般と通ずるところ」に「阿高式の影響」が及んでいることは古くから指摘されていた（三森1983p.306）が、これらの正当な位置づけは矢野健一（矢野1993）の再発見まで待たざるを得なかった。

2）ここで扱う貝殻文系土器は、後述する西南四国縁帯文系土器の伝播直前までに限定する。

3）これはかつて河口貞徳が「協和式」と呼んだもの（河口・出口1980）に相当するという東和幸の御教示を得たが、協和式の資料内容について筆者の認識が不充分なため、ここでは誤解による混同を避けることにした。

4）同様な視点は徳永貞紹（徳永1994p.27）が指摘している。氏は、南九州東部では並木式や典型的な阿高式が出土していない点に着目して、大平第一類を並木式に、新東晃一の「宮ノ前式」（新東1988）を阿高式に各々併行させた（徳永1994註13）。

5）研究史上、土器型式名として「岩崎下層式」（河口1953）「宮ノ前式」（新東1988p.26）を踏襲すべきではあるが、標識遺跡である岩崎遺跡や宮ノ前遺跡は公表されている資料が僅少で不明な点が多いため、やむを得ず1遺跡内出土土器による時期区分で代用した。

6）松山式に類似する土器型式として、かつて賀川光夫等が設定した「下弓田式」がある（鏡山編1961）が、少量で実体が不明であったという経緯がある。なおこの下弓田式と、胴部文様に綾村B式の系譜を引く「青木式」とが融合した結果として、市来式の成立を想定する場合がある（鈴木1963）。

7）この説は撤回（松永1994）されてはいるものの、氏は市来式の口縁部形成法には地域差があり、かつ氏の言う「く」字形口縁に縁帯文土器の影響の可能性を指摘しており、傾聴すべき見解である。

8）肥厚によって文様帯を区分する場合には、文様系譜名は小文字のアルファベットで表す（表5・右）。

9）この粗製深鉢の意義については、木村剛朗（木村1984）が逸早く着目している。

参考文献

阿部芳郎　1994　「後期第Ⅳ群土器の型式学的検討」『津島岡大遺跡』4

泉　靖一　1971　『泉　靖一著作集』4

泉　拓良ほか　1991　『桜島における縄文人の生活と火山災害　―桜島・武貝塚の調査―』京都大学防災研究所

泉　拓良・玉田芳英　1986　「文様系統論・縁帯文土器」『季刊　考古学』17

犬飼徹夫　1976　「愛媛県平城貝塚の再評価」『考古学ジャーナル』129

　　1993　「愛媛県平城貝塚出土Ⅱ式土器の再検討―西脇論文への反論―」『古代吉備』15

犬飼徹夫・十亀幸雄ほか　1979　『岩谷遺跡』　岩谷遺跡発掘調査団

今村啓爾　1977　「称名寺式土器の研究」上・下　『考古学雑誌』63―1、63―2

浦田和彦　編　1992　『一野遺跡』　有明町教育委員会
岡本健児・広田典夫・木村剛朗　1978　『三里遺跡』　中村市教育委員会
乙益重隆・前川威洋　1969　「縄文後期文化　九州」『新版考古学講座』3
鏡山　猛　編　1961　『下弓田遺跡』　宮崎県教育委員会
鈴木義昌・西田　栄　1957　『伊豫平城貝塚－縄文式土器を中心として－』御荘町教育委員会
鎌木義昌・高橋　護　1965　「瀬戸内」『日本の考古学』II　縄文時代
河口貞徳　1953　「南九州における縄文式文化の研究　岩崎及び木ケ暮遺跡について」『鹿児島県考古学会紀要』2
　　1957　「南九州後期の縄文土器－市来式土器－」『考古学雑誌』42－2
　　1981　「市来式の祖形と南島先史文化への影響」『鹿児島考古』15
河口貞徳・出口　浩　1980　『石峰遺跡』鹿児島県教育委員会
川崎　保　1991　「九州縄文時代中期から後期の土器編年－「阿高式系土器」研究の方向性－」『信濃』43－4
　　1992　「篦削文を有する土器についての一考察」『同志社大考古学シリーズV　考古学と生活文化』
木村剛朗　1974　「高知県片粕遺跡出土の土器－縄文文化後期片粕式土器の研究－」『考古学ジャーナル』96
　　1984　「高知県中村市三里遺跡出土の縄文後期三里式粗製土器」『遺跡』26
木村剛朗ほか編　1982　『平城貝塚』御荘町教育委員会
小池史哲　編　1977　『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』4－上　福岡県教育委員会
小杉　康　1988　「縄文時代の時期区分と縄文文化のダイナミックス」『駿台史学』73
　　1994　「亀ケ岡ホライズン－縄文晩期前葉－中葉の広域編年」『縄紋晩期前葉－中葉の広域編年』
小林久雄　1967　『九州縄文土器の研究』
笹川龍一　1993　「なつめの木貝塚の縄文土器」『香川考古』2
茂山　護　1957　「串間市大平出土の縄文式土器」『九州考古学』1
新東晃一　1985　『中原遺跡』志布志町教育委員会
　　1988　「縄文土器－九州地方　南九州(2)－」『考古学ジャーナル』296
新東晃一・中島哲郎・井ノ上秀文　1981『中尾田遺跡』鹿児島県教育委員会
新東晃一・宮田栄二　編　1985『倉園A遺跡』志布志町教育委員会
新東晃一・前迫亮一ほか　1989『中ノ原遺跡（I）』鹿児島県教育委員会
新東晃一・東　和幸　1990『寺山遺跡・年ノ宮遺跡』菱刈町教育委員会
新東晃一・堂込秀一　1991『川上（市来）貝塚』市来町教育委員会

新東晃一・児玉健一郎　1993『川上（市来）貝塚２』市来町教育委員会
鈴木重治　1962　「九州における縄文土器の編年」『先史学研究』4
　　1963　「南九州に於ける貝殻文系土器の終末」『九州考古学』19
瀬戸口　望　1984　『柳井谷遺跡』志布志町教育委員会
高野啓一・柴尾俊介　1978　『頭地下手遺跡』　五木村教育委員会
高橋　章　編　1990　『土佐井地区遺跡』　大平村教育委員会
田中良之　1979　「中期・阿高式系土器の研究」『古文化談叢』6
　　1982　「磨消縄文土器伝播のプロセスー中九州を中心にしてー」『古文化論集　森貞次郎先生古稀記念論集』
千葉　豊　1989　「縁帯文系土器群の成立ー西日本縄文後期前半期の地域相ー」『史林』72－6
　　1992　「西日本縄文後期土器の二三の問題ー瀬戸内地方を中心とした研究の現状と課題ー」『古代吉備』14
千葉　豊・菱田哲郎　編　1991　『先史時代の北白川』京都大学文学部博物館
出口　浩・繁昌正幸　1981　『一湊松山遺跡』上屋久町教育委員会
　　1983　『成川遺跡』鹿児島県教育委員会
出口　浩・中村直子編　1988　『草野貝塚』鹿児島市教育委員会
出原恵三　1992　「松ノ木式土器の提唱とその意義」『松ノ木遺跡Ⅰ』本山町教育委員会
　　1992　『松ノ木遺跡Ⅱ』本山町教育委員会
寺師見國　1939　「肥後水俣南福寺貝塚ー南福寺式土器ー」『考古學』10－7
　　1954　『南九州の縄文式土器』
徳永貞紹　1993　『平原遺跡Ⅱ』佐賀県教育委員会
　　1994　「並木式土器の成立とその前夜」『牟田裕二君追悼論集』
戸崎勝洋・東　和幸ほか　1988　『轟木ヶ迫遺跡』大根占町教育委員会
中島哲郎・牛之濱修　編　1987　『麦之浦貝塚』川内市土地開発公社
長津宗重・管付和樹　編　1990　『丸野第２遺跡』田野町教育委員会
永友良典　1991　『下弓田遺跡　資料編１』宮崎県総合博物館
中野和浩　1993　『長江浦地区遺跡群　役所田・小路野ノ下遺跡』　えびの市教育委員会
　　1994　『田代地区遺跡群　上田代遺跡』えびの市教育委員会
長野真一・井之上秀文　1981　『宮之迫遺跡』末吉町教育委員会
中村修身　編　1994　『山鹿貝塚・夏井ヶ浜貝塚収集資料』芦屋町教育委員会
新田重清　1971　「沖縄浦添市浦添貝塚出土の市来式土器について」『古代文化』23－9・10

西脇対名夫　1990　「伊木力遺跡出土縄文時代後期土器の検討」『伊木力遺跡』
濱田耕作　1921　「薩摩國指宿土器包含層調査報告」『京都帝國大學考古學研究報告』6
林　謙作　1991　「縄紋時代史　8・縄紋土器の型式(3)」『季刊　考古学』34
東　和幸　1989　「春日式土器の型式組列」『鹿児島考古』23
　　1990　『立神遺跡』　田代町教育委員会
北郷泰道・菅付和樹ほか　1985　「平畑遺跡の調査ほか」
　　『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』3　宮崎県教育委員会
北郷泰道・近藤　協　1992　『海蔵寺・様屋敷遺跡』宮崎県教育委員会
本田道輝　1981　「市来式土器」『縄文文化の研究』4
　　1983　「田中堀遺跡出土の口縁部上面施文型の土器について」『鹿大史学』31
前川威洋　1969　「九州における縄文中期研究の現状」『古代文化』21－3・4
　　1979　『九州縄文文化の研究』
前迫亮一　1992　「異系統土器文化の一接点－南九州における縄文時代後期中葉の一様相：丸尾式土器の提唱－」『南九州縄文通信』6
前田光雄　1993　『松ノ木遺跡Ⅲ』本山町教育委員会
　　1993　「平城式についての覚え書き－四国に於ける縄文時代後期前半の一様相－『牟邪志』6
　　1994　「宿毛式、その特質」『(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター研究紀要』1
前田光雄ほか　1991　『尻貝遺跡』大月町教育委員会
松永幸男　1989　「土器様式変化の一類型－縄文時代後期の東南九州地方を事例として－」『横山浩一先生退官記念論集Ⅰ　生産と流通の考古学』
　　1994　「考古資料からみた南九州の地域性－縄文土器を中心として－」『研究紀要　VOL.1』
松藤和人　編　1990　『伊木力遺跡』同志社大学文学部文化学科
松村　瞭ほか　1932　『東京帝國大學理學部人類學教室研究報告』5
水野清一・小林行進　1959　『図解考古学辞典』
水ノ江和同　1992　「小池原上層式・下層式土器に関する諸問題－福岡県築上郡大平村所在、土佐井遺跡出土土器の位置づけ－」『古文化談叢』27
　　1993　「九州の縁帯文土器－九州における縄文後期前・中葉土器研究の現状と課題－」『古文化談叢』30（上）
三森定男　1983　『日本原始文化の構造』
宮本一夫　1990　「文京遺跡第11次調査出土の縄文土器の検討」『文京遺跡第8・9・11次調査』

弥栄久志　編　1981　「加治屋園遺跡」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告－Ⅵ－』　鹿児島県教育委員会
弥栄久志・前迫亮一ほか　1987　『榎木原遺跡』鹿児島県教育委員会
柳澤清一　1993　「列島縄紋式編年の原案」『古代』96
矢野健一　1993　「縄文時代中期後葉の瀬戸内地方」『江口貝塚Ⅰ－縄文前中期編－』愛媛大学法文学部考古学研究室
　　1994　「北白川C式併行期の瀬戸内地方の土器」『古代吉備』16
山崎純男　1991　「第一章．原始・古代　第一節．先史時代　二．縄文時代」『本渡市史』
吉永正史ほか　1990　『松美堂遺跡』菱刈町教育委員会
吉本正典　1992　『田代ヶ八重遺跡』宮崎県教育委員会
V.G.Childe・近藤義郎　訳　1981　『考古学の方法』＜改訂新版＞
J.Newcomer 1982 『THE PENGUIN DICTIONARY OF ARCHAEOLOGY』

Summary

The type of pottery's acquisition is expressed as continuity between pottery's horizon and intermediate period. The result of comparison of pottery's horizon formation process in two examples, we can rise the origin in pottery type which can be "occurrence factor" flowing into local area. The backland of inflow or formation process is not identical. Horizon marker is accepted in pottery's horizon as a main constituent in local area. Therefore, originality is dormant in local area, we can still find uniqueness of localism.

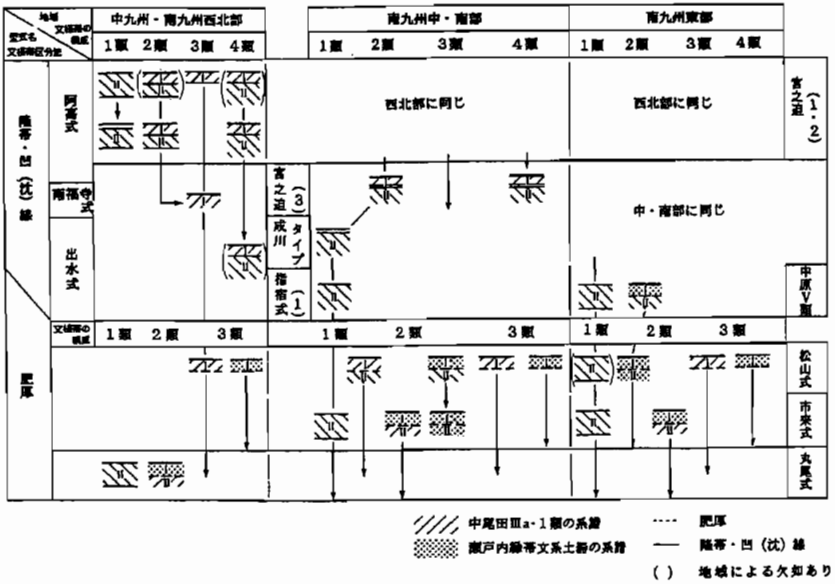


図2　文様帯変遷模式図

地域・型式名 ＼ 文様帯の構成		1類	2類	3類	4類
中九州・西北部	阿高式(1)	D	D	A	C
	阿高式(2)	D	D	A	C
	南福寺式	–	D	A	C
	出水式	–	D	A	G
西北部	中尾田Ⅱ類	C,D	–	A	–
中・南部	宮之迫(1)	B,C	–	A	–
	宮之迫(2)	B,C	B,C	A	C
	宮之迫(3)	–	B,C,E	A	C
	成川タイプ	–	B,E	–	–
	指宿式(1)	–	B,E	–	–
	指宿式(2)	–	k	–	–
東南部	中原V類	–	C,E,j,k	–	–
全域	松山式	–	E,l	a,f	–
	市来式	–	E,(h),i,l	a,f	–
	丸尾式	–	E,(h),i	a	–
器種名		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ

– 無し
→ 系譜関係

《陸帯や凹(沈)線で文様帯を区分する場合》

Ⅰ文様帯 ＼ Ⅱ文様帯	–	A	D
–	–	A	–
A	–	–	G
B	B	B	–
C	C	C	–
D	D	D	–
E	E	E	–
F	–	–	–

《肥厚によって文様帯を区分する場合》

Ⅰ文様帯 ＼ Ⅱ文様帯	–	a	f
–	–	a	f
a	–	–	i
b	–	–	j
e	–	–	k
f	–	h	l

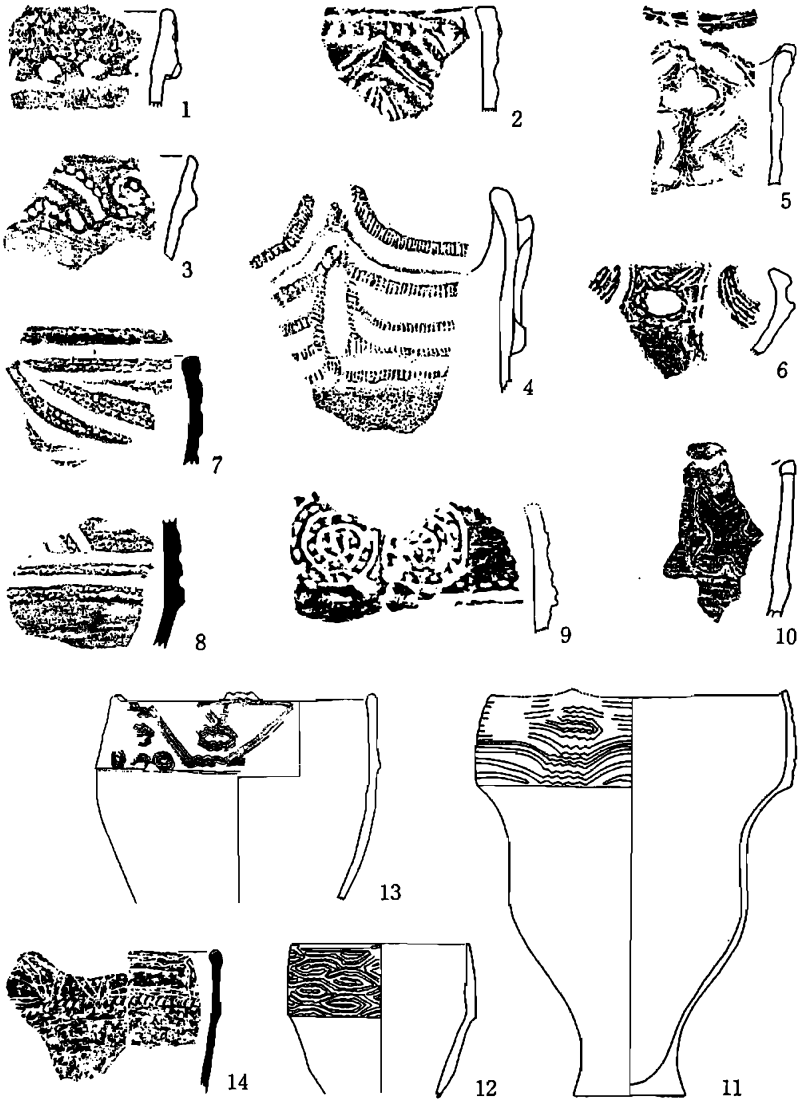
《Ⅰ・Ⅱ文様帯の文様系譜》

中尾田Ⅲa・1類 ・・・ A系譜
中尾田Ⅲa・2類(大平式) ・・・ B系譜
中尾田Ⅲa・3類 ・・・ C系譜
並木式 ・・・ D系譜
塞地式 ・・・ E系譜
瀬戸内縁帯文系 ・・・ F系譜

表5　文様系譜と器種分類表

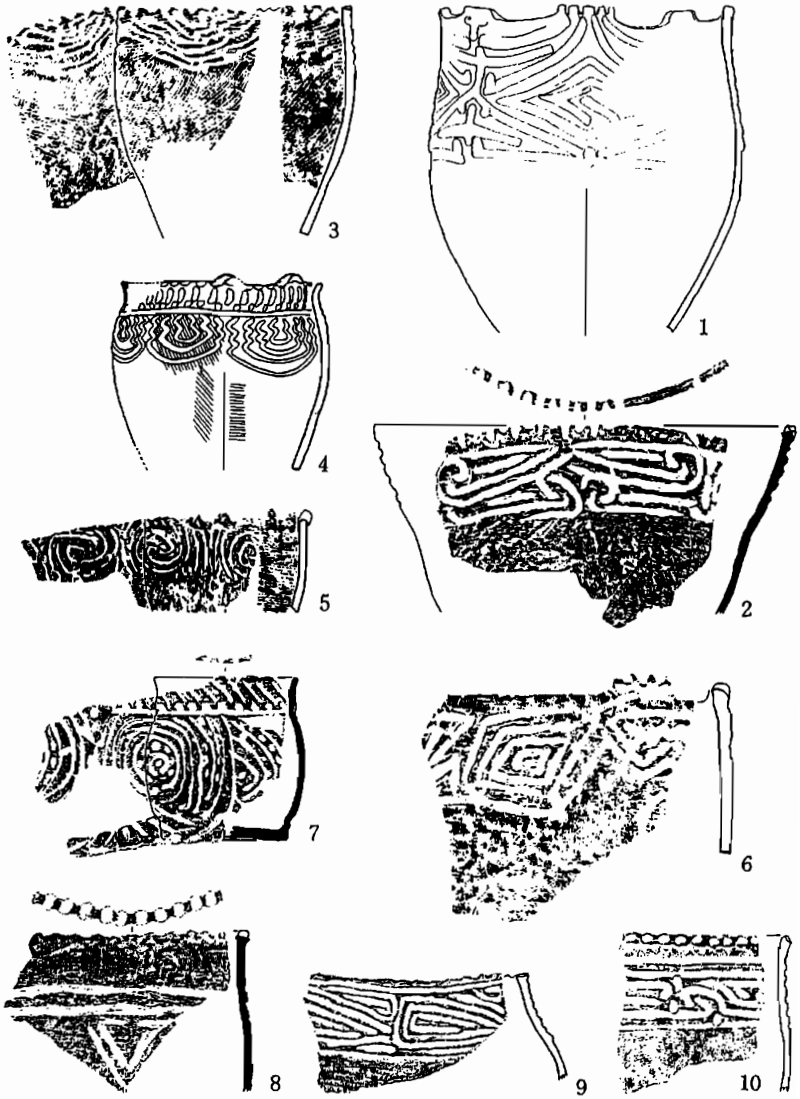
ⅠB類
ⅠC類
ⅠD類
ⅡB類
ⅡC類
ⅡD類
ⅡE類
ⅢA類
ⅣC類
ⅣG類
Ⅱh類
Ⅱi類
Ⅱj類
Ⅱk類
Ⅱl類
Ⅲa類
Ⅲf類

図3　器種分類模式図



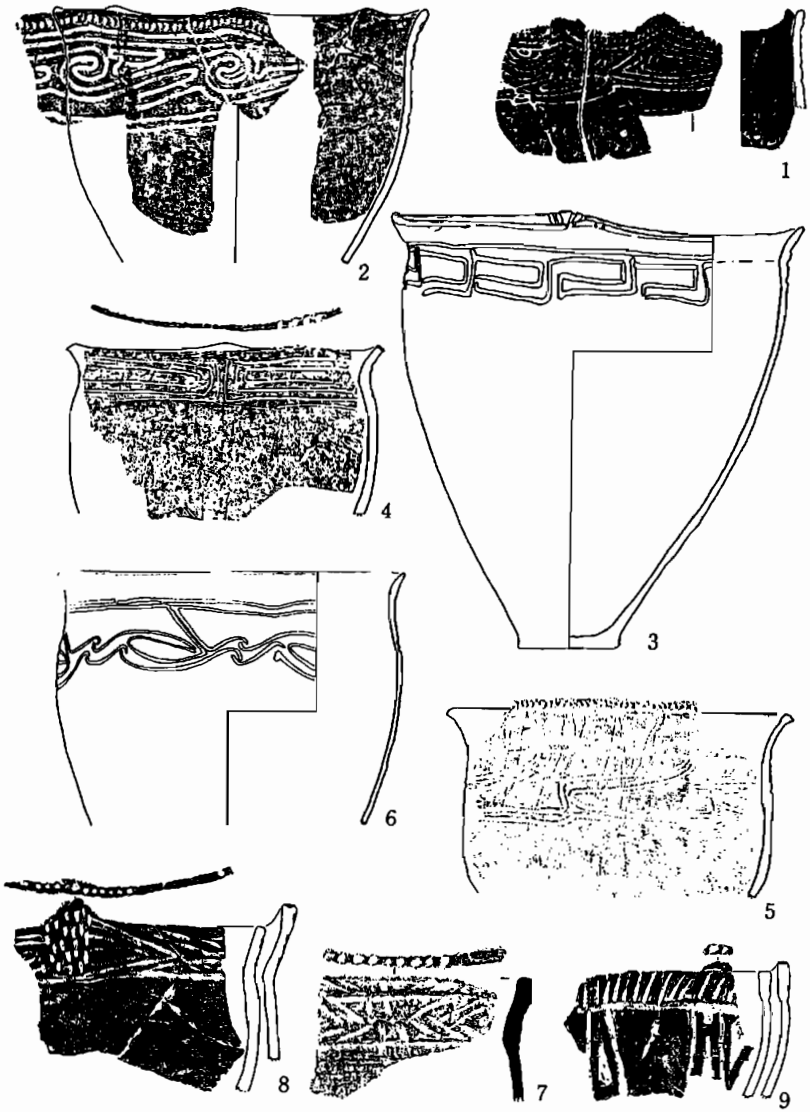
1　松美堂，2・5・7～9・13・14　中尾田，3　山鹿
4　大矢，6　一野，10　轟木ヶ迫，11　大平，12　倉園A

図4　阿高式出現直前期



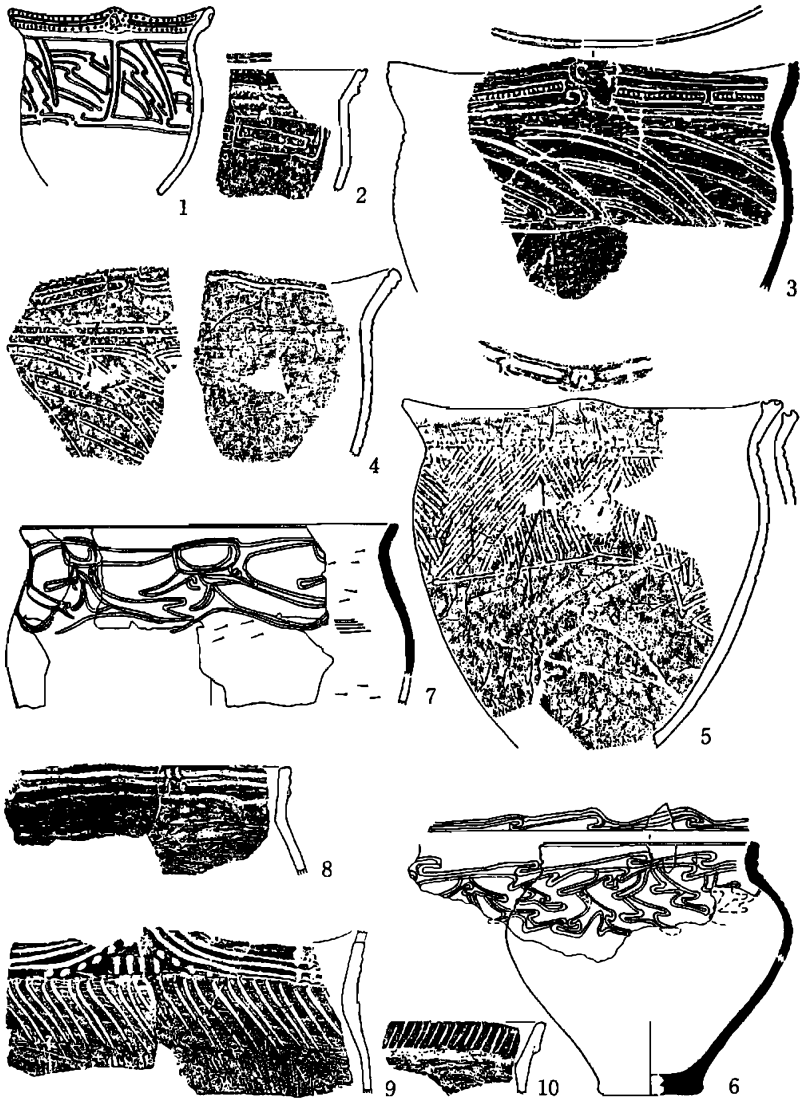
1・6　中尾田，2・7・8　黒橋
3～5　宮之迫，9　大矢，10　阿高

図5　1期



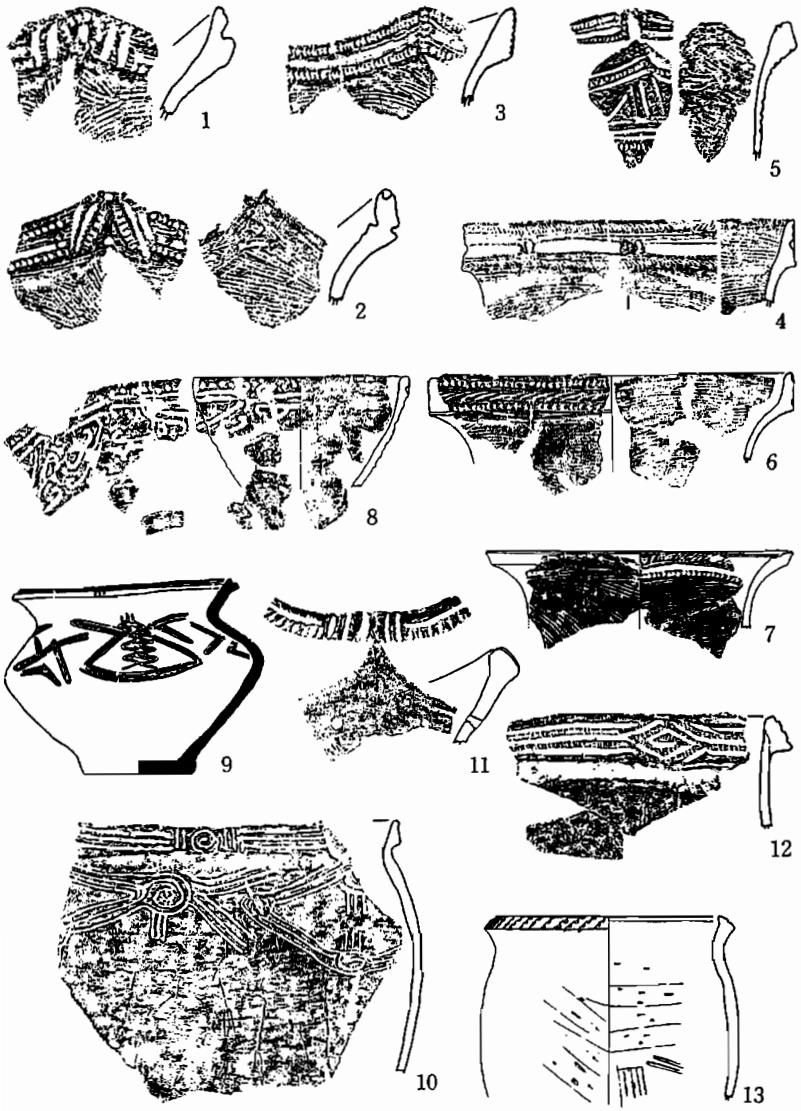
1　宮之迫，2・4　中原，3・5・6　成川
7　南福寺，8・9　出水

図6　2期



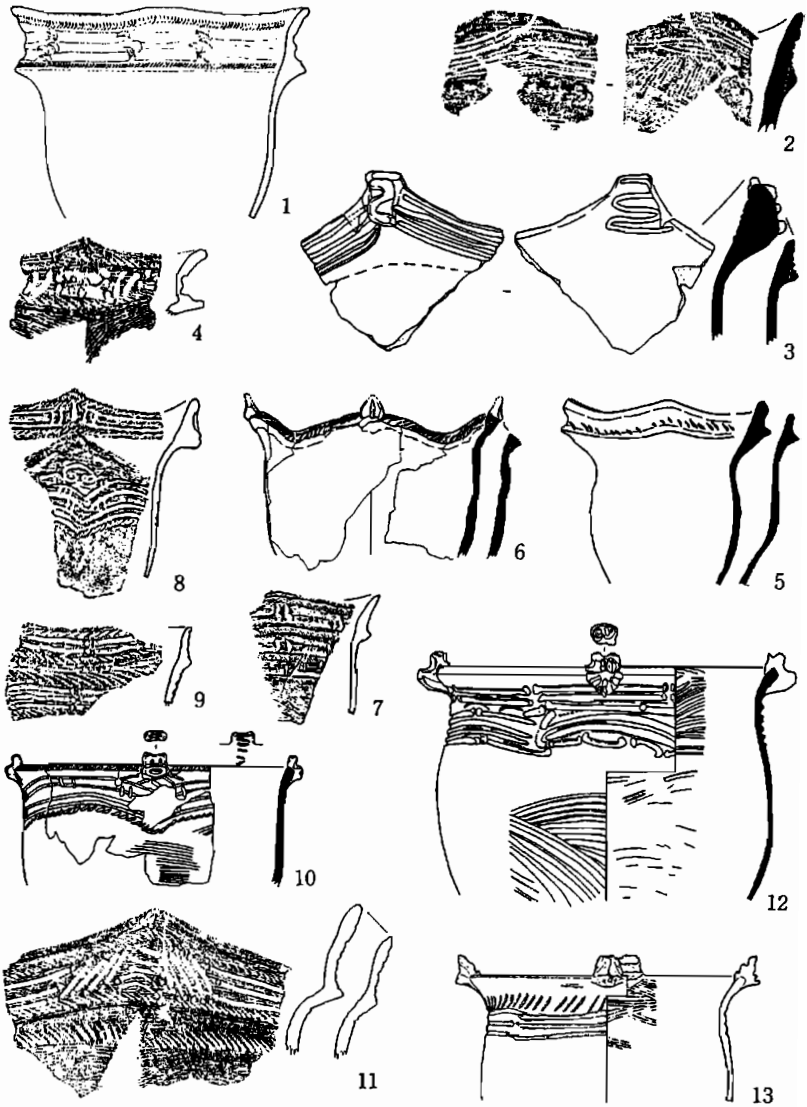
1～5　中原，6・7　武，8～10　出水

図7　3期



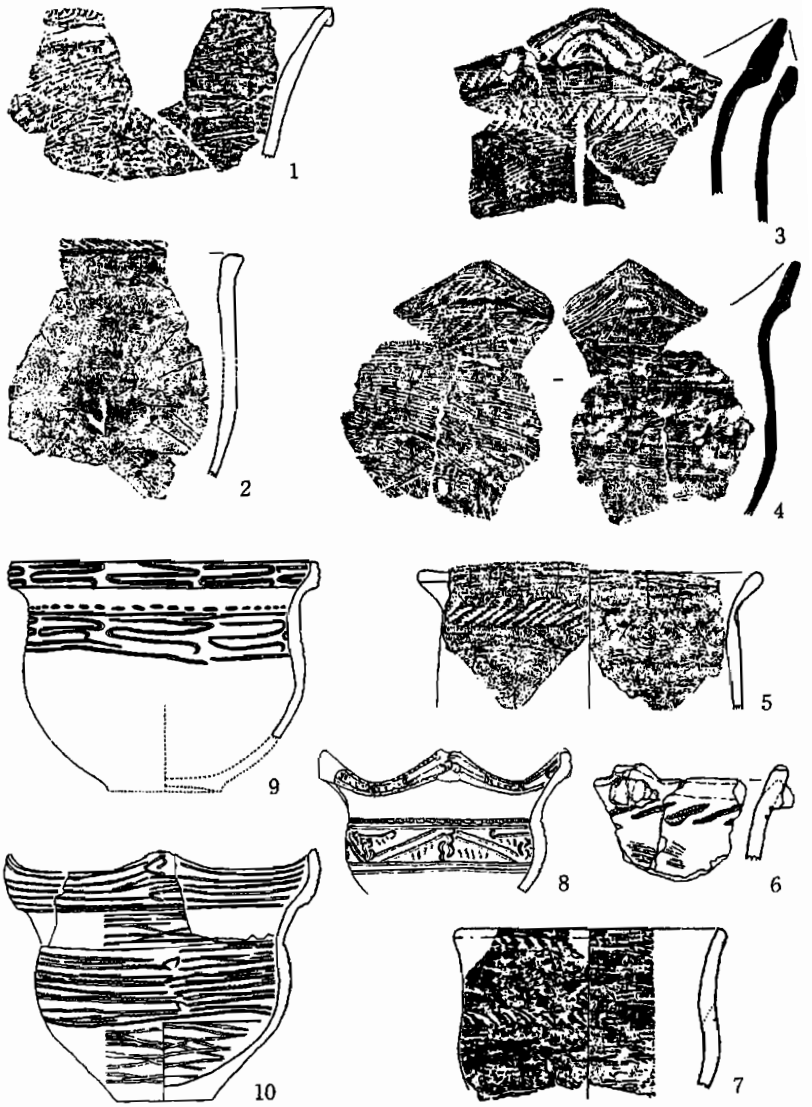
1～4・6　下弓田，5　立神，7・8　丸野第2
9　武，10　草野，11～13　市来

図8　4期



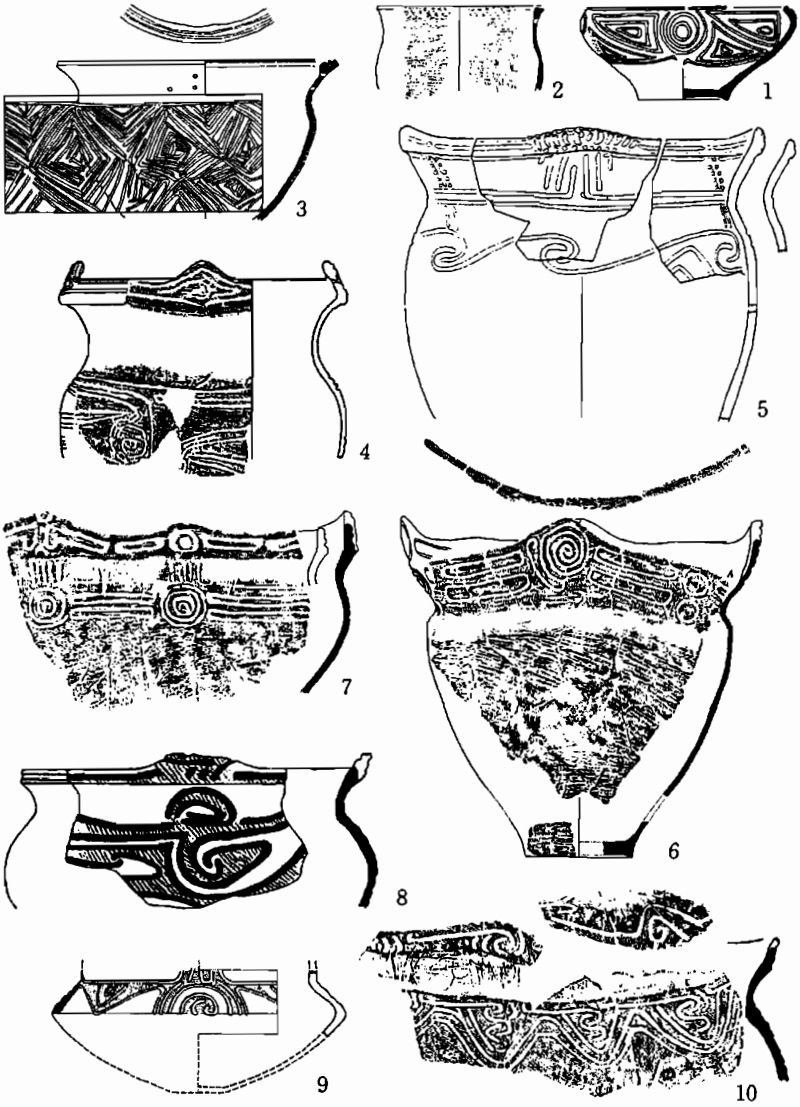
1　市来，2・5・6・10・12　武，3　役所田
4・9・11　下弓田，7・8・13　草野

図9　5期



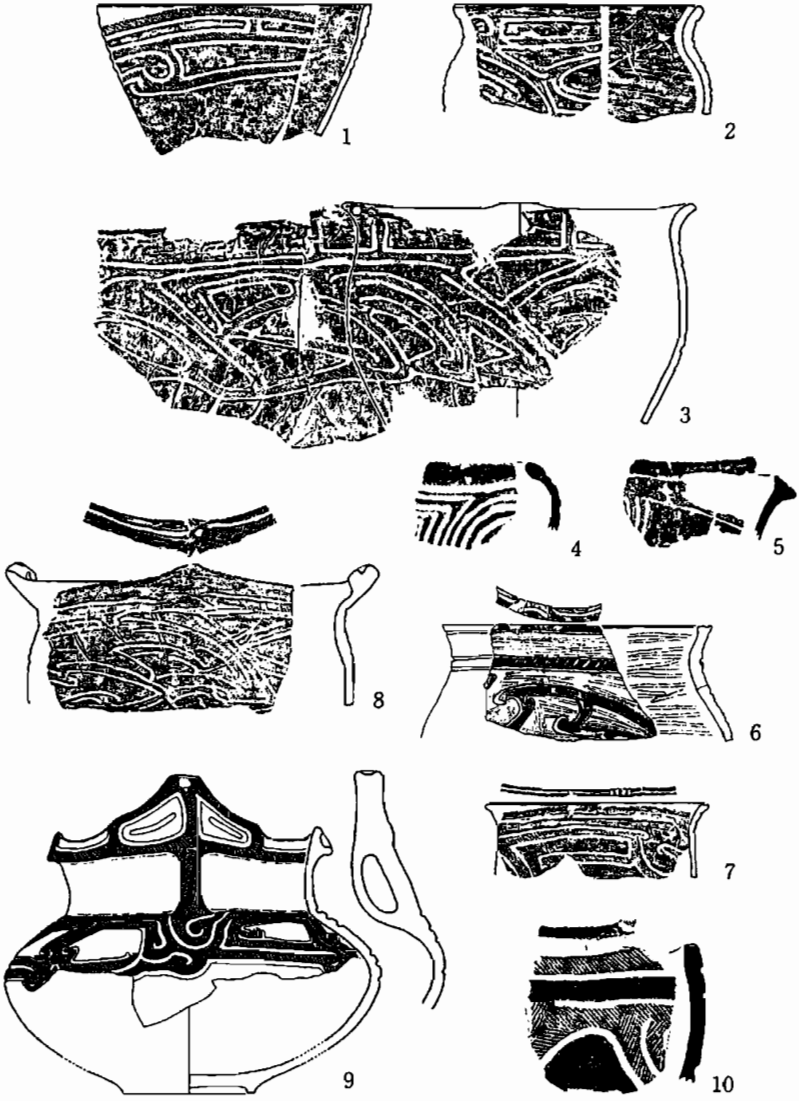
1・8・9　中ノ原，2・5　海蔵寺，3・4　武
6　丸野第2，7　平畑，10　市来

図10　6期



1～3　松ノ木，4　なつめの木，5　土佐井，6　三里
7・8・10　平城，9　柏田

図11　西南四国周辺の様相



1～3・7～9　中原，4　山の中，5　田代ヶ八重
6　市来，10　武

図12　南九州の瀬戸内系磨消縄文土器